

てこな・ミュージック・ジャーナル

ローマの夏 ～レスピーギ3部作に寄せて～

8月、もっとも暑い日々、そんな時期に相応しい作品というのでしょうか？
じりじりと太陽が照り付ける中、ローマの遺跡を歩き回ったとき、思い出されてならなかったのがレスピーギの「ローマの松」でした。ということで、今回はレスピーギの3部作のお話をしたいと思います。

日本からローマに飛ぶと、レオナルド・ダ・ヴィンチ空港、観光立国イタリアらしい名の空港に降り立ちます。そこから列車に乗ると40分ほどでテルミナ駅と名づけられた中央駅に着きます。ヨーロッパの大きな駅にいますと、どこか郷愁を感じてしまうことがあるのですが、それは昔の上野駅を思い出してしまうからでしょうか。

名所巡り

天井が高い駅舎の中を歩き外に出ると、たちまち街の喧騒ですが、でも日本の駅前に見えるような近代的な大きなビルが林立というわけではありません。駅から数キロ圏内に、古代ローマの巨大遺跡群が残るフォロローマーナも、世界に名だたるボルゲーゼ美術館がある広大な公園も、円形劇場として有名なコロッセオも、そしてもちろんトレヴィの泉も、そしてあの「ローマの休日」のスペイン広場もあります。あげたらきりが無いほどの名所、そしてガイドブックには掲載されない遺跡や教会、広場が街のそこかしこにあって、どこを歩いても観るべきものがありすぎて、街はあたかも巨大な美術館、あるいは考古学博物館のようです。そうは言っても車は遠慮なく走っていますし、観光地はスリもありますから、油断して歩くわけには行きません。

ローマを愛したレスピーギ

暑さにフーフーと言いつつも、紺碧の空にそびえるかのような大きな木々の緑や街のあちこちで見える噴水にほっと一息、そのような景色の中を歩き回りますと、まさにレスピーギの旋律が聞こえてくるような気分になるのです。

ポーニャに1879年に生まれたレスピーギは音楽家の父の手ほどきで、ピアノとヴァイオリンを幼くして始め、やがて音楽学校でヴィオラも習い、リムスキー・ニコル、リヒャルト・シュトラウス、さらにはドビュッシーの影響を受けたとなると、その作風の傾向は明らかになりました。

ローマを愛するレスピーギはサンタ・チェチリア音楽院の教授としての職業を得て、歴史が息づく街の暮らしを心から愛し、グレゴリオ聖歌の楽譜を手に、音楽は美しくなければならぬと、ローマを歌う交響詩を3曲作ったのです。

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

「噴水」そして「松」

最初の交響詩「ローマの噴水」は38歳のときの作品ですが、一日の時間の経過とともに、あちこちの噴水を散策し、心情をそこに重ねるかのような印象派的な曲想を作り出しました。「夜明けのジュリアの谷の噴水」「朝のトリトーネの噴水」「トレヴィの噴水」「黄昏のメディチ家の噴水」と標題が付けられた4部分が続けて演奏されますが、最後はどこか感傷的な雰囲気を感じながら、夕闇の訪れとともに音楽は閉じられます。

つぎに「ローマの松」ですが、大きな松が空に映える光景は、レスピーギでなくてもローマの栄華盛衰の歴史を思い起こさせます。教会旋法が使われ、第1部は「ボルジア荘の松」、子どもたちの喧騒が始まります。第2部は「カタコンベ付近の松」。古代キリスト教の地下墓場が舞台ですから、グレゴリオ聖歌が素材に使われ、祈りのような荘厳さを聞かせます。そして第3部は「ジャンニコの松」。満月に照らされるジャンニコの丘、感傷的で耽美的な美しさが響きます。第4部は「アッピア街道の松」。夜明けとともに軍隊の行進が始まり、その迫力の素晴らしさは聴き手を圧倒します。

「ローマの祭り」

喧騒とその後の物悲しさ、ローマのような栄華を誇った一大都市の絵巻のような全曲は、本当に圧巻です。円形劇場で行われた古代ローマの残酷な祭り、巡礼者たちが集うローマネスク時代の祭り、収穫を祝うルネッサンス時代の祭り、そして狂喜乱舞のような現代の祭り。帝国が解体して群雄割拠の時代、敵からわが身を守るために、丘の上に肩を寄せ合うように街は形成されました。斜面を畑にしワインや酪農で生計を立てた平和な時でも、人々の中には熱い血が流れ続け、祭りは人々に興奮を与えてきました。

熱き人々

シエナにノリオと呼ばれる12世紀から続く地区対抗の裸馬レースがあります。地区の人たちはそれぞれの旗、衣装、そして応援歌、恐ろしいほどの熱気が漂い、広場に作られた円形の馬場では騎手は観客たちと同じ色彩の乗馬服に身を包み、熱狂の中を走ります。それはあたかも、かつて円形劇場で市民が奴隷たちの闘いに熱くなった古代と同じ雰囲気を感じさせます。闘争の血を身に秘め続けるかのようなラテン民族たちは、太陽の強烈な光を体一杯に吸い込み、それを吐き出しながら歴史を乗り越えてきたのではないのでしょうか。魔物のような熱気、そのようなものに衝き動かされ、心を奮わせながら「ローマの祭り」をレスピーギは書いたのでしょう。

過去のてこな・ミュージック・ジャーナルはHP「てこなどっと ねっと」<http://www.tekona.net/>でご覧になれます。